ユネスコエコパークで学ぶ

令和3年度 信州ESDコンソーシアム
ユネスコスクール ESD/SDGs 実践事例集

ユネスコエコパークと ESD

自然と人の調和と共生を目指す取り組みである、ユネスコエコパーク。近年では、SDGs の実現に貢献する ESD 実践の場としても注目されています。この冊子では、令和３年度成果発表＆交流会の発表から、ユネスコエコパークを活用した ESD/SDGs の実践事例を紹介します。

日本のユネスコエコパークと参加校

■ ESD

ESD（Education for Sustainable Development、持続可能な開発のための教育）は、私たちの社会の存続に関わる気候変動や貧困、人権、平和などの問題を自分のこととして捉え、その解決に向けて自分自身で行動することを目指し、「持続可能な社会の創り手」を育成する教育です。ESD は、SDGs（持続可能な開発目標）の目標４「質の高い教育をみんなに」のターゲットの一つであり、また、すべての目標達成に人づくりを通じて貢献する重要なキーでもあります。

2020年度から実施されている新学習指導要領では、「持続可能な社会の創り手」の育成という言葉で ESD の理念が取り入れられ、ESD は現在、全ての学校現場で実践される学習活動になっています。

■ユネスコエコパーク

ユネスコエコパーク（Biosphere Reserve：BR、生物圏保存地域）は、ユネスコ人間と生物圏（MAB）計画の枠組みに基づいて国際的に認定された、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目指すモデル地域で、「持続可能な開発について学ぶ場」として注目されています。ユネスコエコパークには、保全機能、経済と社会の発展、学術的研究支援という３つの機能があり、これらが発揮されることで、自然と人が調和した持続可能な地域社会を実現することを目指しています。

世界134カ国に738サイトの BR があり、このうち日本では10サイトが登録されています（2023年2月現在）。

■ユネスコエコパークと ESD

ユネスコエコパークには、豊かな自然環境やそれに根ざした伝統や文化、そして自然環境の保全と調和した持続可能な地域社会の発展のモデルとなる取り組みなど、ESD/SDGs 学習の資源が豊富にあります。ユネスコエコパークには、その調査や活動に関わる様々な立場の人々がいることから、ESD/SDGs 実践の際に連携したり、支援を受けたりしやすいことも大きなメリットです。

また ESD はユネスコエコパークにとって、「学術的研究支援」機能を発揮する主要な手段であると同時に、人づくりを通じてユネスコエコパークの活動全体を推進する効果が期待されています。ユネスコエコパークと ESD の取り組みを組み合わせることで、相乗効果を生み出すことができるのです。

只見ユネスコエコパーク

福島県 ● 只見町立只見中学校

地域とともに学ぶ只見中学校

意識するSDGsのゴール ▶

【内容】

本校のESDは、総合的な学習の時間と生徒会・委員会活動の両輪で実施している。SDGsを意識して、グローバルな視点でものごとをとらえ、足元から活動しているが、なかでも校内のみの活動ではなく地域を巻き込むことを大事にしている。

令和３年度には全校生徒がSDGsを学び、各々課題を設定して調べ学習を行い、その成果を校内文化祭のポスターセッションで発表した。またSDGs委員会を発足し、海洋ゴミを減らす取り組みとしてはじまった新聞紙レジ袋の普及や、SDGsバッジの作成などに取り組んだ。さらに校内文化祭では只見中気候非常事態宣言を出すとともに、ペットボトルの利用抑制活動「Pet Free Monday」への参加を呼びかけた。SDGs委員会が委員会活動として位置づけられたことにより、活動がより持続可能になるとともに、県内外でも活動が知られるようになった。また地域と協働して自然素材「アカソ」の紐を使ったほうきづくりに取り組んだ。

実践した先生からのコメント

小学校でユネスコエコパークを前提としたESD実践を行っていてしっかり意識づけされているので、中学校ではより地域に目を向けた学習実践をしています。

只見町にはユネスコエコパークの施設（只見町ブナセンター）があり、それに関連した資料もたくさんあります。ブナセンターも含め有識者の方がいらっしゃることは私たちにとっても心強いです。ユネスコエコパークであるがゆえに、それを題材としたESDの支援体制があることはメリットだと思います。

みなかみユネスコエコパーク

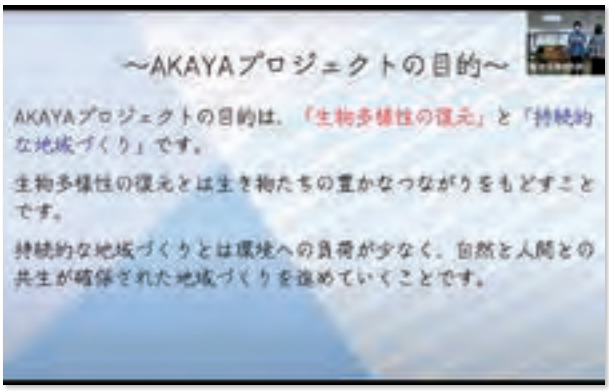
群馬県 ● みなかみ町立新治小学校 5 年生

調べよう　新治の自然

意識するSDGsのゴール ▶

【目標】

日本を代表する豊かな生態系が息づく「赤谷の森」の実態を知り、郷土の自然の素晴らしさを感じるとともに、自分たちにできることを実践しようとする。



【内容】

本校は、みなかみユネスコエコパークの中に位置している。しかし、貴重な自然が生活の一部になっているにも関わらずあまり知られておらず、その良さについて知ったり、考えたりする機会が少ない。そこで、５年生では、ユネスコエコパークがどういう場所なのかを知ることから始めた。児童は、利根川の最初の一滴がユネスコエコパークの核心部から始まることや、貴重なイヌワシの生息地であることなど、多くのことを知り、自分たちが住んでいる町について深く興味を持つようになった。

次に、小出俣の国有林に出掛け、昭和の始めには森の木を活用し炭焼きをしたこと、その後人工林に変えたこと。今は、その人工林をもとの自然林に戻す取組をしていることなどを学んだ。生活の中に木が深く関わっていることを知り、新治の樹木に対する興味がわいてきた。

そこで、みなかみ町が本年度より立ち上げた事業を通して、新治の魅力を体験した。知っているようで知らないことがたくさんあり、新治の新たな魅力に触れることができた。体験活動を通して児童が気付いたことを、友だちや授業に関わった人々と交流しながら考えを築き上げることができた。

実践した先生からのコメント

ユネスコエコパークを題材としたESD実践を行うことで、学校全体として自然保護と経済社会の両立ということが意識されるようになりました。

みなかみ町は林業が盛んな地域で保護者の中にも従事者が多いのですが、自然について考える機会が増えたことにより、自然と共生するための有効的な活用にも視点が芽生え、森林の適切な管理利用の重要性について子供たちの中で正しく認識されるようになりました。

志賀高原ユネスコエコパーク

長野県 ● 山ノ内町立南小学校 6 年生

守りつなぎたい志賀高原の「きれいな水」

意識するSDGsのゴール ▶

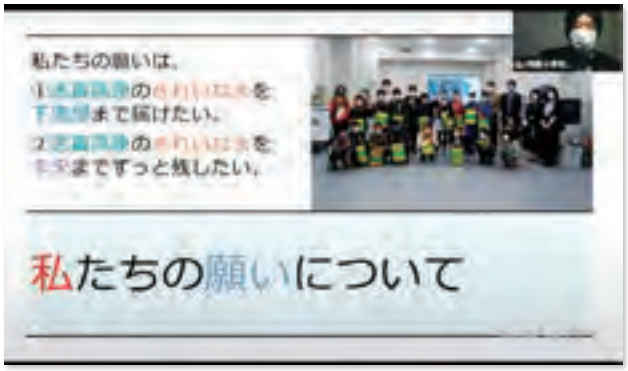
【目標】

・志賀高原の水の状況を知り、水の価値について考えを深める。

・他地域との交流から、山ノ内町を見つめ直す。

ねらい

「水」に対する価値観の変容を促し、それを広げる行動を起こす。



【内容】

５年生のとき、学校近くの田んぼでとれた米が食味コンクールで金賞を受賞した経験から、子どもたちは「水」に目を向けた。そして、「きれいな水」とは何かを疑問に学習を始めた。信州大学アクア･イノベーション拠点を訪問したり、学校周辺で水質検査をしたり、志賀高原の源泉付近で水質調査をしたりして、疑問を解決していくうちに、「水を守りつなぎたい」という意欲を高めていった。そのために何ができるか考えたい子どもたちは、大台ヶ原・大峯山・大杉谷BR にある森と水の源流館や飯田市の施設、行政との交流から考えを深めていった。

当初は「志賀高原の水はきれいだと思う」「おいしい水はどこにでもある」という感覚だった子どもたち。しかし、上にあげたような学習を通して、「本当に志賀高原の水はきれいなんだ。（数値による科学的な根拠をもつ）」、「きれいな水は貴重だ」、「きれいな水をつなぐには、何かをしなくちゃいけない」という意識の変化があった。また、「役場に～～してほしい」から「自分たちも含めた住民の意識が高まらないと何も変わらない」ということに気がつくことができた。

実践した先生からのコメント

ユネスコエコパークでの ESD 実践は、児童にとって地元の価値を見返す機会になったと思います。エコパークの価値、自分たちが住んでいる地域も世界に認められた場所なのだという誇りを持つことに繋がったと思います。そこからその自然環境を生かし守っていく使命感も出てきたと思います。

ユネスコエコパークは保全活動や研究活動が行われている場所なので、子どもたちが実際そこに入って学習すると、研究者や行政とも関わることができます。このことは、ESD 実践の多様な見方を育む上で、とても力強いと感じています。

南アルプスユネスコエコパーク

長野県 ● 飯田市立遠山中学校

遠山郷を守ろうプロジェクト

意識するSDGsのゴール ▶

【目標】

・郷土「遠山郷」の特徴やその良さや課題を知る。
・地域の人と交流することを通して郷土愛を深めるとともに、地域貢献のためにできることは何かを考え・実行していく生徒の育成。

【内容】

本校は過疎化が進む遠山郷にある。地域全体の人口動態から推察するとさらに減少が見込まれる。そんな地域で学ぶ本校生徒は郷土愛が強い。生徒会活動としてスタートした「遠山郷を守ろうプロジェクト」は今年で7年目を迎えた。「自分たちが出来ることから始めよう。」を合い言葉にスタートした地域の清掃活動は今も続いている。本年度も道路や公共施設、観光施設の清掃活動を行った。

地域を盛り上げるためにはまず地域に暮らす人々を知り、関わりを持つことが大切だ。「地域の方に学ぶ会」は、地域の方との交流、コミュニティとの関わりを持つ機会となっている。また、職場体験学習では地元の起業家や働く人たち4～5名を講師に招き、遠山郷で働く意味について学んだ。また遠山郷に伝わる「遠山の霜月祭」は地域の誇りであるが、過疎化にともない伝統の継承が地域の課題となっている。学校で行う「郷土の舞」の学習は、伝統の担い手を育む場となっており、11月には舞を保護者・地域住民に披露した。

このほか、小中学生がSDGsの視点から遠山郷の未来を見据え、自分たちが出来ることを考えていく「遠山三校絆プジェクト」、学校林で森を守ることが自然環境や地域の安全な暮らしを支えていることを体験的に学ぶ「学有林学習」、生徒会が自分たちで育てた花を公共施設などに贈る「花を贈る活動」などを行っている。

これらの活動を通じて生徒からは、今まで以上に「地域の持続可能性のために何ができるか」という声が出てくるようになり、日常的にSDGsを意識するようになった。

実践した先生からのコメント

豊かな村の生活を守るために欠かせない森林を未来の子供たちにも受け継がせていきたいという思いから、昭和30年頃から始まった学有林学習は、地域活動にも繋がっています。その中で森林組合の方からこの豊かな森林を守っていくことがとても重要だという視点を教えていただいています。また地元のガイドさんからエコパークやジオパークについて教えていただいたりする機会から、自分たちがとても貴重な場所に住んでいるということを学んでいます。

飯田市ではローカルとグローバルの両方を意識するLG教育を推進しており、ユネスコエコパークにはグローバルな視点を持つきっかけとなることを期待しています。

白山ユネスコエコパーク

岐阜県 ● 高山市立荘川中学校

総合学習（郷土教育）

意識するSDGsのゴール ▶

荘川中学校のESDは、総合的な学習の時間と生徒会・委員会活動を組み合わせて実施しており、地域と密接に連携した郷土教育が特徴である。この郷土教育を起点に、SDGsや持続可能な荘川地域を意識しながらテーマが決まっていった。

令和３年度には、地域の宝物でもある「荘川桜」を題材とした物語「嫩芽（どんが）」の演劇や、その絵本作りに取り組み、地域に配布した。１年生は、グラウンド脇の水路に群生する梅花藻（バイカモ）の保全活動を行った。３年生は修学旅行に向けた平和学習の一環で、作成した折り鶴を施設等に届ける「折り鶴プロジェト」に取り組んだほか、高山市役所にある平和の鉦の前でセレモニーを行い、平和宣言を伝えるなどした。

本校には、「私たちは故郷荘川を誇りに思い、心豊かにたくましく、持続可能な未来を創ります」という宣言が、荘川町まちづくり協議会や白山ユネスコエコパーク、ユネスコスクールのロゴとともに書かれた横断幕が掲げられている。引き続き白山ユネスコエコパークにあるユネスコスクールであることを誇りに、ESD推進拠点としての取り組みを進めていきたい。

実践した先生からのコメント

従来から郷土学習を推進していましたが、荘川町まちづくり協議会が、市町村合併によって薄れつつある地域アイデンティティを確立する観点として、白山ユネスコエコパークに着目したことが、それを意識したESDを実践するきっかけになりました。また高山市役所の環境政策課から派遣されたユネスコエコパークの担当者がSDGsに詳しかったことも、ESD実践を推進する助けとなりました。

現在では白山ユネスコエコパークにあるユネスコスクール登録校ということが、学校の一つのアイデンティティとして育ってきています。

綾ユネスコエコパーク

宮崎県 ● 綾町立綾中学校

SDGs 達成に向けた活動の実施報告

意識するSDGsのゴール ▶

【目標】

生徒会スローガン

「lead ～綾中が導く持続可能な世界～」の達成に向けて

【内容】

本校では学習機会としての「総合的な学習の時間」と、生徒の主体的な活動機会としての生徒会活動をつなげた総合的なESDが行われている。

総合的な学習の時間においては、１年生は自然への探究、２年生は人(街)への探究、３年生は自分への探究と、３年間を見通した ESD の根幹を担う体系的な学習計画となっているが、コロナ感染症の影響で実施できない活動が多くあった。その中で、世界貢献、SDGs 達成という共通の目的を一貫して持ち、リサイクル活動やボランティア活動等を中心とした代替学習（活動）を行った。目的を明確にすることで、相互性や連携性を意識させながら、持続可能な社会の担い手として必要な資質や能力の育成に努めるとともに、生徒の意識も高まった。

生徒会活動については、昨年度の生徒会スローガン「Move ～綾中からつなぐ持続可能な世界へ～」の流れを引き継ぎ、今年度も「lead ～綾中が導く持続可能な世界へ～」と、「持続可能な社会」をテーマとしたスローガンが生徒達によって決定された。それを元に、生徒総会の中で出た取組案(エコバッグ作成、使い捨てカイロ回収等)を、生徒会を中心に実現していくことで、他者と協力する力や進んで参加する力が高まったと思われる。

実践した先生からのコメント

１年生の探究学習では、綾ユネスコエコパークセンターのほか、イオン環境財団や JAXA の協力も得ながら、質の高い学習を行うことができます。またあわせて、新たに赴任した教員が担当することが多い１年生の担任にとっても、ユネスコエコパークである地域について知る機会となっています。ユネスコエコパークに関わる多様な方と連携して学習を進められることは、大きなメリットだと感じています。

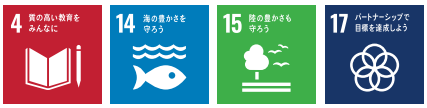
地域を知ることによって、地域の問題解決に繋がる力が養われると同時に、世界に繋がる意識と、町への誇りを持つことにつながっています。本校には「郷土愛のもと世界へ広く翔け」と書かれた石碑がありますが、国際的な枠組みであるユネスコエコパークを題材とした ESD は、まさしくこの言葉にぴったりの内容だと思います。

屋久島・口永良部島 ユネスコエコパーク

鹿児島県 ● 屋久島町立八幡小学校3・4年生

発見、発信、屋久島の自然

意識するSDGsのゴール ▶



【目標】

3年生：屋久島の自然を体験する活動を通して、屋久島には豊かな自然環境があることを知るとともに、それを守るために自分にできることに進んで取り組もうとする態度を育てる。

4年生：屋久島の自然を体験する活動を通して、屋久島の豊かな自然環境を守る人々の諸活動の工夫や努力について理解し、地域のために自分にできることを進んで行動しようとしたり、様々な人々と協力したりしようとする態度を育てる。

【内容】

本校では3、4年生が連学年で「総合的な学習の時間」に取り組む体制をとっている。2年続けて同じテーマで学習を行うことで、探究が深まるとともに、自分が学んだことを下の学年の児童に教えたりするようになることを期待している。

この実践は、屋久島国立公園や世界自然遺産、自然保護活動について調査し、自分たちにできる発信方法や自然保護活動を考え実行する学習を通して、主体的に学び、考え、行動する力を育てることを目指している。

子どもたちは屋久島世界遺産センター（環境省）の協力のもと、屋久島の海と山でレンジャー体験を行い、屋久島の自然の素晴らしさを体感した。海の活動で子どもたちは、海の生物に触れ合ったり遊んだりして、屋久島の自然の良さを実感したが、同時に海岸に多くのゴミが落ちていることにも気づいた。このことからゴミ問題に意識を向けた子どもたちは、自らゴミ拾いを行うとともに、LINE を活用したゴミ拾いキャンペーンを展開し、家庭や地域の人にも参加を呼びかけた。また山の活動では、ヤクシカの密度増加による自然環境への影響を学んだ。子どもたちはシカ捕獲を推進する方策として給食でシカ肉を使ってもらうことを発案し、給食センターに手紙で要望した。これが実現したことから子どもたちは、自分たちの行動が大人を動かす力があることを実感したようであった。

実践した先生からのコメント

世界自然遺産でもある屋久島では、そのことを教育的資源として活用する「屋久島型 ESD」に 10 年ほど前から取り組んでいます。昨年度からは学校全体のグランドデザインの中心軸にも位置づけられています。

屋久島型 ESD の実践を通じて、そこに住んでいる子どもたちが屋久島のいいところを言える・伝えられる・しっかりと感じていること、そしてその素敵なものをどう守っていけるかということを考え行動できるようになること、最終的には屋久島を学ぶことを通して、世界に目を向けたり、世界の課題に対して何か活動や行動したりできるようになることが期待できます。

このほかにも全国のユネスコパークでESD／SDGsの学びを実践する学校から、以下のような発表がありました。

志賀高原ユネスコエコパーク

【長野県】山ノ内町立東小学校 ● 4年生

ぼくたちわたしたちの　山ノ内の宝　コカリナ

志賀高原生まれの楽器「コカリナ」について学習してきた。「いろんな曲を吹けるようになりたい」と願いを持った子どもたちは、コカリナのために作られた曲である「森の朝」や音楽会で歌う「ふるさと」などの曲を練習した。9月、実際の工房を見学したことで、「コカリナがある山ノ内町ってすごい」という気づきがあり、町役場の国際交流員のレーガンさんとの交流を重ね、山ノ内町の魅力も伝えられるよう、活動にとり組んできた。

【長野県】山ノ内町立西小学校 ● 2年生

炭焼きをしよう

今年度、2年生はSDGsの目標である「陸の豊かさも守ろう」「エネルギーをみんなに　そしてクリーンに」に関連した森林資源の持続可能な開発を目指して活動を行った。子ども達は、かつて地域で盛んであった炭焼きを学び、森林の維持、利活用のために、校区内の森林の間伐材を使って炭焼きを行い、みんなで協力して炭を作ったり、使ったりする活動を通して、間伐材を利用して作る炭焼きの良さを実感した。

【長野県】山ノ内町立南小学校 ● 3年生

自分たちのできることをしよう　～ゴミから深まる学び～

昨年、新聞紙エコバックを作り、子どもたちは「ゴミ」に目を向けた。5月に児童会活動でクリーン作戦（ゴミ拾い登校）を行うと、通学路には大量にゴミがあった。それを何とかしたいという思いから、月曜日をゴミ拾い登校日と決め活動をしてきた。しかし拾っても拾ってもゴミがなくならない。そこで地域にポスターを掲示した。他にも給食の牛乳瓶の蓋を用いて紙づくりを行った。また、ペットボトルキャップでブローチ作りなども計画し、ゴミのアート化にチャレンジした。

【長野県】山ノ内町立山ノ内中学校● 1・2年生

ユネスコスクールとして 山ノ内町をみつめる

2学年

草津研修旅行を通して、学び考えたことをきっかけに山ノ内町をみつめる。

1学年

志賀高原研修旅行を通して、学び考えたことをきっかけに山ノ内町をみつめる。

令和3年度信州ESDコンソーシアム成果発表＆交流会の様子はこちらからご覧いただけます。
▶ https://esd-nagano.org/conference2022/
English version also available ▶ https://esd-nagano.org/en/conference2022/

【長野県】高山村立高山小学校 ● 4 年生

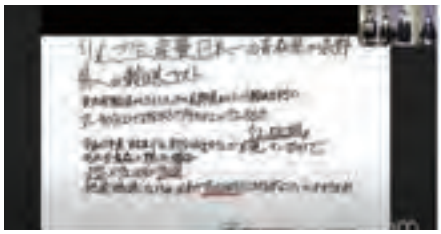
高山小学校　ひとりだち　ともそだち

長野県の北部にある高山村。地域と学校が一体となって、未来ある子どもたちを育てています。今日は、地域と共に歩む学校の地域学習、親子で学べるわくわく村、そして６年生を中心に活動する児童会活動、４年生の総合的な学習の時間「ごみへらし大作戦」の取り組みを紹介します。今日発表者をつとめる４年生の子どもたちは、社会科のごみの学習で見学した村の施設「地力増進センター」の仕組みをきっかけに、自分たちのできるごみの減量方法を考えました。ごみの減量が地球温暖化を防ぐことにつながることを視野に入れながら、自分たちができることで小さな一歩を踏み出そうとしています。

【長野県】高山村立高山中学校● 2 年生

地産地消の効果（数学）

- 学校給食について「センター便り」等から、地域食材についての情報を集める。昨年度用いられた地域食材について、日本国内の主な産地や、日本の自給率・輸入依存度を調べ、CO_2排出量や輸送費などから、その有効性を検証する。
- 栄養教諭からのアドバイスを受けて、今年度のデータでさらに有効性を検証する。



南アルプスユネスコエコパーク

【長野県】飯田市立上村小学校 ● 3 ～ 6 年生

上村のためにできることを考え、行動しよう

昨年度、様々な自然体験活動を通して改めて上村の良さに触れました。そんな子どもたちが上村の人口減少等に課題をもち、自分たちにどんなことができるか話し合い、計画を立てました。小学校で育てた椎茸や下栗芋の販売、観光客の方への歌の発表、上村地区のごみ拾い、上村の良い所を市街地で宣伝するなど…、持続可能な上村のためにどんなことができるか話し合い、活動してきました。また、これらの活動から上村を大切にしようとする心情がさらに育まれたように思います。

【長野県】飯田市立和田小学校 ● 3・4 年生

お茶の収穫から販売へ

和田小学校では、持続可能な和田小学校を目指すために、南信濃特産のお茶を栽培し、お茶販売を行っている。5月には、小学校児童のみならず、保育園の友だち、保護者や地域の皆さんと一緒にお茶摘みを行った。製茶されたお茶を、地域の「わだっ子応援隊」の皆さんと一緒に袋詰めし、販売へとつなげている。子どもたちは、お客さんに喜んで買ってもらうための方法を考えて練習し、販売日当日を迎え、完売することができた。

屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク

【鹿児島県】屋久島町立八幡小学校 ● 5 年生

創ろう、魅力ある屋久島

八幡小学校の５年生は、昔ながらの米作り体験を通して、屋久島の文化や産業について考えてきました。昔ながらの米作りの利点や課題を整理していく中で、屋久島の環境を守っていくためには、昔ながらの方法も続けていくべきだと考えるようになりました。当日は、SDGs と関連させて学習のまとめを発表します。

ユネスコエコパークで学ぶ
令和3年度 信州 ESD コンソーシアム
ユネスコスクール ESD/SDGs 実践事例集

発行日：令和 5 年 2 月28日
発　行：信州大学教育学部（信州 ESD コンソーシアム）
〒380-8544　長野県長野市西長野6－ロ
TEL：（026）238-4034　mail：kyoesd@shinshu-u.ac.jp
編　集：水谷　瑞希（信州大学教育学部
信州 ESDコンソーシアムコーディネーター）
協　力：目黒　英樹（福島県只見町立只見中学校　教諭）
山中　　薫（群馬県みなかみ町立新治小学校　教諭）
菅原　勇介（長野県教育委員会事務局北信教育事務所生涯学習課
指導主事、元山ノ内町立南小学校　教諭）
手塚　幸宏（長野県飯田市立遠山中学校　教頭）
加藤　　愼（長野県飯田市立遠山中学校　教諭）
髙木　　聡（岐阜県高山市立荘川中学校　校長）
仲野　翔二（岐阜県高山市立荘川中学校　生徒指導主事）
中川　春香（宮崎県綾町立綾中学校　教諭）
橋口　和真（鹿児島県屋久島町立八幡小学校　教諭）
※所属・肩書きはR4年11月現在

この冊子は、令和4（2022）年度 文部科学省 SDGs 達成の担い手育成（ESD）
推進事業により作成しました。